

教育のつどい大阪2015

劣等生へのあり方を問うー入国について教育をー

「教育のつどい大阪2015」の全体会が9月6日(日)に摂津市民ホールで行われ、府立芥川高校太鼓部の演奏や教職員による朗読劇の後、記念講演がありました。

今年の講演は、馬場久志氏(埼玉大学教授)が「競争と管理で脅かさせない人間らしい教育を」

をテーマに心理学を研究している立場から講演されました。講演の要旨は以下の通りです。

大阪では、学力テストの結果を内申書に入れるの？

全国学力テストは正式には学力・学習状況調査です。調査ですから、テストではありません。調査の目標から外れていません。高校入試の際の内申書(調査書)は、本来、受験者個人を表すためのものであり、学力全体の数字に影響されるものではありません。受験競争



が激しくなるので、入試の資料として使われるべきものではないのです。文科省もこの立場ですが、しかし、夏に行われた文科大臣と松井知事との会談で「今回に限り」という政治的判断で認めてしまいました。

子どもを見る目に変化が

2004年の経済諮問会議に当時の中山文科大臣が学力向上をめざして「世界のトップへ」と競争させる目的で全国学力テストが提案され、2007年から実施されました。大人社会が自己責任論

に満ちている中で、子どもを「人材」としてみるようになってきました。子どもの失敗に対して、不寛容になり、厳しく罰する必要があると考えるように変化し、また「子どもの権利など認めない」という流れが入ってきてきました

いじめ対応も同じ「いじめの加害者をやっつける」という流れになってきています。

大阪市のいじめの対策基本方針(2015年8月)では、実質的に転校をせまる方向が出てきて、教職員に対しても事件の報告を怠ると処罰するまで言っています。これで、いじめが本当になくせるのでしょうか。

全国学力・学習状況調査の目的とは

子どもたちが、どれだけの学力をつけてきたのかを調べるものですから、本来、結果が出たら、校内で平均値より下位の子

どもたちに、どのように指導していけばよいかを考えるためのものであるべきです。高校入試の成績に入れようとする大阪のやり方は、目的外使用です。

抽出で行われる調査は、国立教育政策研究所で学習指導要領実施状況調査(2013年)などありますので、資料として充加を求め「悉皆調査」としては全国学力テストを毎年行う必要はありません。

過去の反省は

生かされているのか イギリスでは、同様のテストが行われていたが、弊害が多いとして現在はやめています。日本では、60年代に行われていたが、できない子を当日欠席させるたり教師が答えを教えたりなどがあり、世論の力で中止させました。このような反省がある

のもかわらず、復活し高校入試の資料として使うまでにエスカレートしてきています。

つながる力を学力に

子どもたちは成長の過程で多くの失敗をします。子どもたちはその経験を生かしながら、成長していくものです。「失敗は成功のもと」ということわざがあります。「学力テスト」という知識の断片をはかるテストに左右されることなく、真の学力をつけることが望まれています。

「北方領土教育に関するアンケート調査」に、回答する必要はありません

「北方領土教育に関するアンケート調査」が内閣府より各学校に届いています。私たちは、中立であるべき学校教育の場に、現政権の見解を一方向的に押しつけるような調査が、政府(しかも文部科学省ではなく内閣府)の手によって行われることは、大きな問題があると考えています。

泉北教職員組合は和泉市・高石市・忠岡町の各教育委員会へ「各学校に対し、回答を求めたり、回答を促すような指示をしないこと。」を申し入れています。

調査は学校名、担当者名も明らかにするものとなっており、回答内容によっては今後、学校や個々の教員に対する圧力も心配されますので、「回答をしない」ことを呼びかけます。

ぜひ参加しよう！教育のつどい大阪2015

教科別分科会 2016年1月17日(日) 9時30分～ 高槻市立桃園小学校
問題別分科会 2016年1月24日(日) 9時30分～ 茨木市立東中学校

教職員の生活と権利を守るため、泉北教組に加入してください。